

『子どもの社会力』

(門脇厚司著、岩波新書、1999年)読書メモ

『いまの子どもたちにみられる変化とは、煎じ詰めれば、他人への関心と愛着と信頼感をなくしていることであり、自分が普段生活している世界がどんなところであるかを自分の体で実感できなくなっていることではないか』と著者は考えています。

そして、今の子どもに(限らず大人にも)必要なのは、既にある社会に個人として適応する側面に重きをおいた「社会性」ではなくて、社会的動物ないし社会的存在たるに相応しい人間の資質能力である「社会力」であるとして、その現状分析から、どういう方向性が求められているのか、それをどうしていくことによって育成していくことができるのかについて丁寧に解説してくれていて、なかなか読み応えのある本です。以下、私なりに印象に残ったことを中心にメモをしていきます。

子どもの育ち方にどんな異変がみられるか

1 子どもを無気力化するテレビの影響

ヒトの子が社会的動物になっていくために、大人との相互行為が重要であるにもかかわらず、ことさら声の調子(高さ)を高くし、同時に、声の抑揚を誇張する、「母親語」を赤ちゃんに使える大人が減っており、赤ちゃんの初語が遅れている。

大人と乳児や幼児との応答が希薄になり、その隙間をテレビが埋めている。テレビというメディア装置は、子どもにとってきわめて接近しやすい装置であり、子どもが他の活動を選択する可能性を著しく狭めている。

実は、テレビ視聴は、子どもにとっては、生理的に大変な負担を強いており、テレビが発する光と音の洪水とも言うべき刺激は、子どもの受容能力をはるかに超えた過剰な刺激であるため、子どもはこの過剰な刺激から身を守るために、脳の内部を(アルファ)波に切り替え、一種の睡眠状態にする。そうすると外からの刺激にまったく反応しなくなり、その状態が習い性になると、今度はテレビをみていないときでも外界からの刺激に反応しなくなるといわれている。

こういったことが実際の症状としてあらわれる「テレビ症候群」(数秒間以上注意を持続することができない、落ち着きがなくじっと座ってられない、攻撃的な行動を抑えることができない)については、実は文部省が1958年から60年にかけて(つまり50年前)に小中高校生2800人に対して行ったテレビの影響調査によっても、その傾向が明らかにされていたが、この報告書はなぜか「部外秘」として公開されていなかった。

2 「フツの子」の自閉症児化

感情をこめた人間関係が不得意で、口をきく必要のない機械相手のほうが気が楽で、カセットテープ一台あれば何時間一人でいても平気だ、という「自閉症人間」が増えている。

自閉症児が世に知られるようになったのは今から60年以上も前の1943年の精神医学者の論文からであるが、そこには、自閉症児の特徴として、

- 人と接するときに視線や表情による情緒的やりとりが欠けている
- 言葉の使い方に歪みが見られる
- 物をクルクル回すなどの儀式的な行動を繰り返す

一般の人々と同じ生活サイクルの中に入ってこない
物に対する特別な技能やすぐれた記憶力をもつ
そして、自閉症児が生まれるメカニズムについて現在わかっているのは、
生まれる前あるいは生後間もない時期に、ヒトの欲求や感情や本能的な社会的行動
の発生源である脳の深部に障害を受ける。
脳の深部に受けた障害によって、ヒトの子に先天的に組み込まれている、外界に働
きかける機能が解発できないままに止まる。
先天的な働きかけ活動の鈍化が、情報処理機能を受け持つ大脳皮質の作動を鈍らせ
る。
大脳皮質の機能が正常に作動しないため、身体や感覚器官を使って現実世界に対し
行動を起こし、起こした行動への反応を脳にフィードバックすることを繰り返すこ
とで構築される、実践的な脳の成立が不全のままに止まる。
ということで、これに加えて、
ヒトの脳が構造的にきわめて複雑である
ヒトの子は、生後ほぼ1年ほどの間は、自分の意思で自由に行動できない状態にお
かれています

という2点が自閉症児を生みやすくしているらしい。

真正の自閉症児が、生前か生後直後に受けた脳の深部への障害が原因である一方で、最
近、「フツーの子」たちの自閉症児化が進んでいるといわれる。それは、1990年頃から、ゆ
ったりと過ごすべき乳幼児期に、一日中英語のテープを聞かされる子や、早期教育の教室
を連れ回される子や、親の期待に応えないからと拒否的に扱われる子が多くなっているこ
とが原因の一つではないかと言われる。整理すると、

子どもたちの生活がコマ切れになり、生きている充実感を持ち得なくなっている。
生活空間から、生きた人間が排除されている
消された人間に代わって、さまざまなモノやメディアが生活空間を埋め尽くしてい
る

乳幼児期からの稀薄で拒否的な人間関係のせいで、培われ損ねた人間への愛情や信頼が、
学校生活でのいじめ体験でいっそう党のいていったとみるのが妥当。

こういった自閉症的症状、そして若い世代に広がる人間嫌い現象は、「社会力」の形成不
全といってよく、近い将来、社会を解体させることにつながるのではないかという危惧が
ある。

社会を成り立たせる人間の条件とは何か

人間がつくる社会というものは、人間のどのような特性と行為によって形成され維持さ
れるのだろうか。

社会学が「人間は社会的存在である」としている理由には、下記のようなことがある。

生活に必要な資源を社会から調達している
生活を通じて、社会的行為を身につけ社会的知覚を培っていく
獲得した社会的行為や知覚を使って、他者と相互行為しつつ生活を営んでいる
生活を通じて次の世代を生み育てていく

社会を成り立たせるためには、社会的相互行為が行われなくてはならないが、それには、
私たちが生活している生活世界がどのように意味づけられ、定義づけられているかについ
て、社会生活を共にしている他の人たちと同じ認識である必要がある。

近年の発達心理学や動物行動学による新生児や乳幼児についての研究によって、次のよ
うなことがわかってきている。

ヒトの子は生後直後からヒトの顔を識別し、それに特別の関心を払っており、

ヒトの口から発せられた意味をもつ言葉としての音と、意味のないただの雑音とをはっきり区別し聞き分けているし、

生後二、三ヶ月くらいになるとクーイングといわれる「クー」とか「アー」という音を自分で意図的に発して、母親の応答を促す働きかけをするようになり、

クーイングに応じて母親が発した言葉を耳で聞き、それを真似て自分で同じ音を出すようになり、

八か月頃には、自分が興味を示したモノに手をのばして大人の目を同じものに向けさせる「手指し」を始め、

九か月になると、さらにその意図を明確にした「ユビ指し」をするようになる。

また、ヒトの脳が大きくなったのは、人間が営む社会生活と密接に関係しており、人間の社会的活動が複雑だからだといわれている。そして、さまざまな社会での集団サイズを調べた結果、メンバー同士が互いに知り合っていて、信頼をおいて相互行為をしており、それだけにまとまりがあり、安定している集団が150人前後の規模であることがわかった。

人間には、次の二つの社会を作っていく社会力の素といったものが先天的に備わっている。

「互惠的利他行動」・・・血縁関係がなくても、後にお返しをもらえるあてがあれば、自分の利益を犠牲にしても他の誰かの利益になることを進んでする

「視覚的共同注視」・・・幼児と向き合い、母親が幼児とアイコンタクトを取ってから視線をゆっくりと移動させたとき、生後二か月の乳児でも母親の視線を追うことができる子がおり、生後14か月では全員が追視できる。子猫を見ながら、母親が「かわいいね」と口にしたら、同じ子猫を見ているヒトの子は、“かわいい”という感情が母親の心の中で引き起こされていることを理解し、自分の中に生じている感情が「カ・ワ・イ・イ」という音の連続で言い表すことを習得していく。

だから、わたしたちが考えればいいのは、どのようにしたら、このような特性をフルに稼働させることができるかということにつきる。

社会という実体が、人間と離れて存在してはいないということを考えると、必要なのは、既存の社会への適応を旨とする「社会性」ではなくて、社会を作り、運営し、変える力としての「社会力」ということになる。

その社会力の下地として、「他者を認識する能力」と「他者への共感能力ないし感情移入能力」があげられる。

社会力が衰退し、社会的凝集力が衰退している現在、社会力をもとにした社会構想力の向上が急務とされている。

ヒトの子の社会力はどのように形成されるか

社会力の原動力が作られる3つのステップ

社会的原基（または、社会的のり〔糊〕、社会的磁力）の形成

0歳～3歳の時期に形成される、ヒトの子が自分以外の人間（他者）に対して関心と愛着と信頼を持つこと。そして、それはヒトの子が先天的に備えている高度な能力をフルに発揮させることによって培われる。

社会的要素の共有

4歳～青年期が終わる25歳頃までに習得し共有する、言葉とその意味、そして、他の人々や自分が社会で占める社会的位置とそれに伴う役割行動、生活世界への意味づけ、価値や社会規範や美意識。それは、日常生活の中で、ヒトとヒトが相互行為を続けることによって習得され、共有される。

社会的行為の日常化

成人期に入る20歳代後半～定年を迎える60歳頃までに、社会的行為が日常的なも

のになり、往々にして決まり切った行為をただ繰り返すだけに終わってしまうが、この時期にこそ社会的想像力を強化して、社会を作り、社会をよりよく運営し、さらには、いまある社会を改良し、場合によっては、既存の社会を大きく変革する意欲を持つようにしなければならない。

ヒトの子の発達、遺伝形質を通じて先天的に与えられた能力によって環境に働きかけ、環境からの反応を受け、また、環境からの働きかけに対して反応を返すという相互作用の繰り返しによって先天的な能力の性能を高めていくということによって形成されるという見方が常識になっている。そして、運動であれ、認識であれ、記憶であれ、情緒であれ、人間の発達をつかさどっている身体器官は脳である。

子どもの成長環境はどう変わったか

経済成長至上主義によって、合理化と効率化を旨とする生活環境と生活様式に変化し、結果として、人と人の、直接的で、感情のつながった接触や、誰かと一緒に何かをする機会と場を、限りなく減少させてきた。

子どもの社会力をどう育てるか

子どもの社会力を育てるにあたって、大人がしなければならないことは、生まれた直後から、可能な限り、子どもとの相互行為に努めること、につきる。

子どもたちに、その年齢でできることは何でもやらせること、その子がやりたいといったら何にでも、たとえそのことが危険を伴うことであっても、あえてチャレンジさせることが子どもを大切にすること。

教育というのは、社会的人間としてそれ相当の資質や能力が育った段階で行ってこそ降下を発揮するのであって、社会力の基礎的資質ができていない人間に無理強いしても効果は逆になる。

家庭の、特に父親に求められることは、仕事重視と家庭や地域軽視の価値観やライフスタイルを変え、家や地域で子どもたちと一緒に時間を過ごすことに喜びを感じるようになること。また、学校と地域に積極的に関わることだ。

なぜ、地域社会が大切かというと、地域は子どもたちにとっての全生活領域であり、また、地域社会には多彩な人々が住んでいるから。子どもたちができるだけ多く地域の大人たちと相互行為ができるよう、ハード、ソフト両面で智恵を出し合い、地域を変えていくことが求められている。

具体的には、1943年にデンマークで始まった「冒険遊び場」がヒントになるだろう。

冒険遊び場とは、「子どもの身体や、欲求や、行動は、発達段階に応じて、どんどん変化するものであり、また同じ年齢でもその子によってさまざま異なるものである。それゆえどの子のどのような要求にも応じることができ、また子どもの欲求をかきする刺激に富んだ環境こそ、子どもの発達に望ましい」という哲学にもとづいて作られて場所。

結局、子どもの社会力は、生きることに對する大人たちの前向きな姿勢があり、それから発する強いコミュニティ意識があり、それに根ざした大人たちの地域づくりに連なるさまざまな活動があり、その中に子どもを取り込みつつ重ねられる大人と子どもの相互行為の過程で育てられ強化されていくのだと考えるべきだろう。